Osaka University Knowledge Archive

Title	シュライエルマッハーの美学と解釈学の研究
Author(s)	岡林, 洋
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40952
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 8 】

氏　　名	岡林　洋（おかばやし　ひろし）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　13282　号
学位授与年月日	平成 9 年 5 月 7 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	**シュライエルマッハーの美学と解釈学の研究**
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授　神林　恒道 (副査) 教 授　森谷　宇一　　教 授　上倉　庸敬

論 文 内 容 の 要 旨

これまで美学あるいは芸術哲学の分野でシュライエルマッハーの思想が論じられる場合があるとすれば，それはもっぱら初期ロマン主義の機関誌『アテネーウム』に掲載され，当時の芸術および批評活動に大きな影響を及ぼした『宗教論』(1799)との関わりにおいてであったといってもよいであろう。感情の立場を重視し，これを通じて世界と人間との普遍的な関わりを論じようとしたシュライエルマッハーの「宇宙の直観」という考え方は，ロマン派の世代に熱狂的に受け入れられ美的に解釈し直され，「芸術宗教」という初期ロマン派の運動にひとつの方向性を与える理念へと形成されていったのである。

本論文はこうしたロマン的シュライエルマッハーの思想を，ここでこと改めて取り上げ再評価しようというものではない。むしろこれまで美学の立場からはほとんど無視されてきた，しかし近年，哲学的解釈学の視点からもその先駆的な意義が認められつつある，後期の美学思想に光を当てようとしたものである。「宗教論」の美的解釈とは別に，シュライエルマッハー自身が美学芸術学について語りはじめるのは1819年の『美学講義』以降のことであるが，その集大成と見なされてきたのが，ロムマッチ版と呼ばれる『美学講義』(1832/33)であるが，その叙述には繰り返しや混乱ばかりが目立つ，いわば「形式の欠如した思想のおかゆ」とまで酷評され，解釈学の領域においても「誤れるロマン主義的心理主義」に陥っていると批判され，後期の美学芸術学の思想形成においてシュライエルマッハーが肯定的に評価されることは，これまでほとんどなかったと言っても過言ではない。

全体の構成は，まず「芸術宗教」と呼ばれた前期の思想にすでに胚胎していた後期の美学思想への志向性を，全体的な構想において予示的に述べた「序章　『芸術宗教』を越えて」，そして「第Ⅰ部　美学思想の体系的成立」と「第Ⅱ部　解釈学の体系的成立」からなり，第Ⅰ部と第Ⅱ部の中間部に「インテルメッツオー　批評と文献学」を挟み，最後に付録としてシュライエルマッハーのもうひとつの重要なテクストである「学士院講演『芸術の概念について』」についての資料紹介を付している。本研究は，四百字詰め原稿用紙に換算して，およそ630枚からなっている。

まず「序章　『芸術宗教』を越えて」において注目すべき点は，「芸術宗教」という枠組みでシュライエルマッハーをロマン主義者として規定してきた，『宗教論』での「宇宙と個人の合一」の契機としての「宇宙の直観」というテー

ゼの再検討である。この概念こそ，シェリングの美的直観と重なり合う，ロマン主義的な美的汎神論的世界観を象徴するものであると捉えられてきた。しかし論者は『宗教論』第二版（1806）において，この「直観」という言葉が，しばしば「感情」という言葉に書き改められていることを指摘している。そこからシェリングの客観主義とは一線を画する，シュライエルマッハー独自のスピノーザ主義への主観主義的，感情的な対応の姿勢が次第に浮かび上がってくる。この感情の主観性における宗教そして芸術の内面化への傾向を，この時期において傍証するものとして挙げられているのが『キリスト降誕祭』（1805）という小冊子であるという。音楽をモチーフとして繰り広げられるこの対話篇のうちに，論者は後期の美学の体系と関わる新しい感情理論の萌芽を読み取ろうとしている。

「第Ⅰ部　美学思想の体系的成立」は三章と補遺からなっている。まず「第一章　美学思想形成期におけるシェリングの影響」において論者は，前章から引き続いて，「宇宙の直観」をめぐる従来の見解を歴史的に照合しつつ，さらに踏み込んでシェリングとシュライエルマッハーのテクストを比較分析し，そこに前者の決定的影響と後者の立場の独自性を明らかにしようとしている。シェリングの美的直観は，絶対的同一性としての宇宙を対自的，つまり客観的に捉えるものであり，芸術作品の中には，いわば完結した宇宙が取り込められている。これに対して，シュライエルマッハーの場合には，芸術作品とは「間断なく活動し各瞬間に自己を啓示する宇宙」がそこに刻印される，いわば「通過点」なのである。つまりは宗教の本質が宇宙に対する主観的個性的体験に基づけられたように，芸術作品にも客観的表現を越えた主観的な感情体験が反映されているのである。この芸術家の「個性」に到達するために必要とされるのが，後に「解釈」と呼ばれることになる，芸術観照において成立する一種の創造活動なのである。こうした「美学」に至るための不可欠な前提と見なされるのが，「精神的歴史的生命現象の学」という，シュライエルマッハー独自の『倫理学』である。この『倫理学』は精神的生命の諸領域，つまり社会的，政治的，学問的，芸術的，宗教的生活を考察するものである。そこでは精神文化生活の全体が並列的に論じられるが，シェリングのポテンツ論やヘーゲルの弁証法のような価値の等級や序列は存在しない。この『倫理学』はもともとシェリング的「思弁的自然学」を補完する，つまり「理性によって自然を霊活化，あるいは倫理化する」「思弁的精神学」として構想されたものである。この自然学と倫理学の根底にあって，この相対的に対立する両極を媒介するのが，後に「弁証法」と呼ばれることになる「エレメンタール・フィロゾフィー」である。

「第二章　美学の弁証法的基礎づけ」では，現象学派の美学者であるR. オーデブレヒトによる編集と綿密な注解によって初めてその全貌が明らかにされた，1819年の『美学講義』が取り上げられ，「感情」の問題を中心に現代の美学に直結するその先駆性が論じられている。この『美学講義』こそは，当時の「観念論期の美学的構築主義の真只中において生の現実を唯一保持していた」ものであったと，オーデブレヒトは評価している。「美は自然の中によりも，芸術の中にはるかに重大なものとして見出され」，「美は人間の活動の所産としてある」。これがシュライエルマッハーの美学の基本的な立場なのである。

シュライエルマッハーは人間の諸機能を，世界に対する人間の関係から，二つの対極的な活動，つまり自然の「有機的機能」と理性の「知性的機能」の間の揺動として構成している。この両者は，すでに触れた「理性による自然の霊活化」としての「知」の質料と形相に相当するものである。こうした「知」の体系を，絶えざる「生命の揺動」における対極性と産出性の中に認めようとするのが，シュライエルマッハーの「弁証法」的方法なのである。そしてこの生命の揺動において，決して対自的にはならず，絶えず生成し続けるのが「感情」である。芸術活動とはこの根源的な「感情」に根差した活動である。感情において，人間の意識は意識それ自体に立ち戻るのであり，それは「純粋な自己意識」と呼ばれる。

こうした感情を外化し表現を与えるところに芸術活動の本質が認められる。その発端にあるのが，外的刺激や興奮によってもたらされる瞬間的な感情であるが，その際の無意識的な感情表現が伝達可能なものになるためには「内省」の契機がそこに割って入り，惹起された生の感動を抑制し秩序づけることが要求される。そこから生じてくるのが，内的に深められた「感激」と内省的意識の同一性，つまり「魂の中の情動的な持続状態」としての「気分」であり，ここに個性的自己意識を啓示の場とする芸術表現が可能となる。

「第三章　自己告知としての芸術の理論」においては，従来の美学史の視点からすれば必ずしも高い評価を得ている

とは言いがたいが，シュライエルマッハー美学の定本と見なされてきたロムマッチの編集による『美学講義』(1832/33)の再検証がなされている。論者がここで取り上げているのは，クローチェあるいはディルタイによつて評価された，自己意識の外化としての芸術表現に関わる「発生論的記述」をめぐる問題である。この問題を相互に補完するところに位置付けられているのが，ディルタイ，そしてまたオーデブレヒトによってもその文献的価値が認められている「学士院講演」(1831/32) である。

最初にクローチェがこの問題に関心を抱いたのは，ドイツ観念論の体系的美学とはまったく異なる視点からの，つまり経験的，科学的な「下からの美学」という方法論の先駆性についてであった。しかし論者はそうした十九世紀的評価の枠組みを越える，シュライエルマッハーの解釈学的眼差しをそこに読み取ろうとしている。

その意味で重視されなければならないのが，芸術意識の生成の発端に位置する「没芸術的感情」，つまり自然衝動的で非意志的興奮がいかにして芸術表現として外化されるかについての記述である。シュライエルマッハーは，この未だ芸術ならざる没芸術的発端を，人間の生の感動の最も直接的な表現としての「演技と音楽」をモデルとして具体的に分析を進めている。芸術表現の内省化によって次第に意識化されながらも，なお残存する芸術の「自然的側面」，つまり「無意識的」で「意のままにならない」側面は，観照者の側にある積極的な働きを要求することになる。つまりそれ自体として閉ざされた作品を開かれたものとするために，芸術作品の享受に際して「解釈」という積極的な創造的契機が認められるということである。シュライエルマッハーにとって「受容性」と「産出性」は同じひとつの事実であり，「解釈学は芸術論である」という言葉はまさしくこの意味で理解されるべきであろう。

「インテルメッツォー　批評と文献学」は，「ルツィンデ擁護論」という Fr. シュレーゲルの作品についての美的批評を通じて，シュライエルマッハーがいかにしてこの解釈という問題を具体的に展開してみせたかを分析し，さらにまたこの新しい美的解釈と批評の方法が，プラトンの翻訳という仕事のうちにどのように反映しているかを論じている。文字どおりこの章は，シュライエルマッハーの「美学」から「解釈学」に議論を進めるための媒介的な役割を担っている。

「第II部　解釈学の体系的成立」は三章から構成されている。「第一章　作品解釈の地平」では，シュライエルマッハーの解釈学研究を行なう際の起点と見なされる『文体論』(1790/91) が取り上げられる。シュライエルマッハーにおいて，やがて「美学」と「解釈学」がそれぞれの学問領域へと分化していくことになるのだが，この論考ではこの二つの領域がいわば渾然とひとつになって論じられているという。つまり近代的な「美学」という理念が成立する以前の「美的な芸術と学問の理論」という枠組みで論じられているのであるが，そこにかえって現代の解釈学的美学に繋がる可能性が認められる。その際 Stil という言葉は，単なる「文体」に留まらない普遍性をもって理解されるであろう。しかしまずここでは取りあえず，「解釈学」の方法論を予感させる「解釈の地平」として「文体概念」が分析されている。

「第二章　解釈学の基礎付づけ」では，体系期の解釈学への中継点としての役割を担う『箴言集（解釈学のために）』(1805，1809/10) が，いかにして形成されたかという経緯をたどりつつ議論が展開される。この『箴言集』は，もともと聖書解釈のための手引きとして読んだ，エルネスティの『新約聖書の解釈提要』についての批判として書かれたメモを編纂したものである。これによれば，従来の解釈学の最大の欠陥は「理解における没技術性」にあったとされる。すなわち客観的解釈（文法的解釈）に対する新たな主観的解釈（技術的解釈）の必要性を，シュライエルマッハーは説いたのである。「予見的方法」と呼ばれたこの方法は，これまで誤れる心理主義，あるいはロマン主義的感情移入説として批判されてきた。しかしこの「個性的なものを直接把握する」方法は，常に「文体論」との連関において述べられていることを，論者は指摘している。シュライエルマッハーが言わんとするのは，文法的解釈は心理的解釈によって補完されなければならず，この両者を有機的に媒介しているのが「文体」による統一なのである。かつてシュライエルマッハーは，その「心理的解釈」によつて批判されてきたが，現代の言語論は「文法的解釈」によつてシュライエルマッハーを評価しようとしている。しかし，そのいずれもシュライエルマッハーの解釈学の本質を見誤っているのである。

「第三章　文学的解釈学の示唆」では，シュライエルマッハーの解釈学をめぐる現代的評価，さらにまた「美学」と

「解釈学」の両者を総合する「解釈学的美学」としての現代的評価の可能性が検討されている。近年，構造主義的言語学の立場から，改めてシュライエルマッハーの解釈学が高い評価を受けているが，それはかつての「心理主義的傾向」に対する反動としての「文法的解釈」という観点からなされたものである。論者はここで，いずれにも片寄らない内在的批判の立場からシュライエルマッハーの解釈学を再構築するとともに，さらにそこに「文学的美学」への志向性，あるいは示唆を探ろうとしている。

シュライエルマッハーの美学思想の形成に，シェリングの同一哲学の体系が大きな影響を及ぼしていたことはすでに触れたとおりである。論者はまず同時代のシェリング学派に属するFr. アストの解釈学との比較を通じて，シュライエルマッハーの「美学」と「解釈学」に共通するその独自の視点を指摘している。それは常に主観的な「個性」に還元される眼差しである。

さてそこで論者が注目するのが，『解釈学概説』(1819)以降から次第に明確な形をとっていく「文法的解釈の第二規範」の問題である。キンメルレはこれを「解釈学の没落」あるいは「誤れる心理主義的傾向」の始まりとみているが，M. フランクは「個性」の「発話の文脈」を理解するための場，言い換えれば，既存の「文法」という表現手段をある新しい統一へと作り上げる「文体」が産出される場として評価している。「文法的無意識」とも称される，この相対する解釈学的課題のいわば結節点は，かつての「美学」における「純粋な自己意識」としての「感情」が発現する意識と無意識の無差別点に対応するものとも解釈されよう。

ところが1819年の『美学講義』では，「文学」の内容についてはほとんど何も触れられていない。したがって文学についての美学的叙述に関しては，ロムマッチ版を手がかりにせざるをえない。そこで再び遭遇するディレンマが，現代の解釈学の傾向と相反する，ロムマッチ版美学の心理学的，発生論的傾きを持った論述と分析であろう。これに対応すべく，論者は「修辞学」から「心理学的解釈」に至る過程において，その不安定と見なされる基盤を補強すべく，シュライエルマッハーの言語理論の検討を試みている。こうして論者は，解釈学の観点から『美学講義』の記述を読み直し，「個性的作品の内的中心」あるいは「全ての芸術的技巧を組織化する中心」を内的核として，そこに美学と解釈学か相互に関連し有機的に統合される可能性を提示したのである。

論文審査の結果の要旨

すでに論文内容の要旨で述べたように，この研究が目指したものは，まず従来のロマン主義者シュライエルマッハーという固定された見方からその芸術論を解き放し，その思想の全体を見渡す総合的な視野から美学史における新たな位置付けを探ろうとしたものだと言える。

シュライエルマッハーの美学について，これまでもごく概説的な美学史的記述や，先行研究の一定の価値評価に基づいて書かれた論文は若干あるものの，本論文のように広範かつ多様な角度から思索を練り上げて構築された美学論文は，かつてなかったと言っても決して過言ではない。シュライエルマッハーの美学，あるいは芸術論に関わる再評価といえば，クローチェの科学的発生論的視点，あるいはオーデブレヒトの現象学的美学の視点，そしてまたディルタイの解釈学的視点からの解釈がその代表的なものとして挙げることができるであろう。

これに対して，本研究を特色づけているのは，その一貫した内在的批判の姿勢である。それは自らの立場に引き寄せての部分的な取捨選択による解釈ではなく，シュライエルマッハーの美学，芸術思想の展開を有機的に関連するひとつの全体として理解しようとするものである。その意味で，この研究はシェリングの同一哲学の影響の下にあったロマン的シュライエルマッハーの美学思想をも決して排除するものではない。

しかし現代の美学の吟味に耐えうるシュライエルマッハーの美学の核を形成するものをあえて求めるとすれば，それはオーデブレヒトが掘り起こした1819年の『美学講義』における「感情の美学」をその中心に据えなければならないであろう。論者はオーデブレヒト版の「美学」を一面的に現象学的方向付けで捉えるのではなく批判的に分析を行ない，しかもロマン的同一哲学的な歴史的シュライエルマッハーの美学思想といかに響き合うところがあるかを見事な

手際で析出してみせる。ちなみに「補遺」として付された「『美学』テクスト形成史とその受容」もまた，美学史研究のための新しい視野を開く貴重な資料である。

オーデブレヒト版美学は，従来否定的な評価しかなされてこなかったロムマッチ版に対して，真にシュライエルマッハーの美学において評価されるべきものは何であったかを明らかにするために編まれたものであったが，論者はこのロムマッチ版美学をも，シュライエルマッハーの芸術思想をひとつの全体像として理解するために不可欠な論述を含むものとして捉えているのである。このように理論相互間の過不足のない公平な目配りに拠るシュライエルマッハーの美学思想についての総合的な捉え方は，これまで例をみないすぐれて独創的な見解であると言うことができよう。

論者のロムマッチ版の解釈においてとくに注目すべきは，「解釈学」の方法論と相互に対応する思想が掘り起こされていることである。解釈学者としてのシュライエルマッハーの思想を，現代的な観点から最初に評価したのはディルタイであろう。しかしなおこの段階では，シュライエルマッハーの「美学」と「解釈学」とは，相互に関連性を見出せないままに別個の問題として論じられていたのである。この二つのジャンルの間に通底するオーガニックな脈絡を見出そうというのが，この研究の最終的な課題となっている。

このシュライエルマッハーの「解釈学」の体系を跡付ける第二部もまた，単なる歴史的研究やテクスト分析には終わっていない。現代においてもシュライエルマッハーを解釈学のひとつの原点として認めるのはやぶさかではないにしろ，その心理主義と呼ばれる主観的解釈の方法については必ずしも評価は高くない。論者はここで構造主義的言語学の近年のシュライエルマッハーの解釈学についての評価に言及しつつ，シュライエルマッハーが求めていた「解釈学」の方法論の最も本質的な部分を浮かび上がらせようとしている。論者がその要と目しているのが「文体」の概念であり，そこに現出する「内的中心」に，かつての「美学」における「感情」に即応するイデーを認めようと試みている。

シュライエルマッハーの美学芸術学的思想を，「美学」と「解釈学」にまたがるトータルな全体として捉え，そこに現代の「解釈学的美学」としての先駆的可能性を見出そうとした，この研究はその構想において雄大であり，鋭い洞察によって貫かれている。しかしながら，その企てが完全に成功しているかというと，若干問題が残るように思われる。美学思想を取り扱った第一部の重厚な論述に比べると，解釈学を中心に論じた第二部は資料の取り扱いや読み込みにやや未消化なものが感じられ，それが結論部での説得力を弱めている印象がある。また文章についても，幾分まわりくどく必ずしも明晰といいがたい表現が散見される。しかしこれらの問題点も，美学史研究に新たな地平を開いた本論文の成果から見れば，ほとんど取るに足らないものであろう。

以上，論文審査の結果，今回の岡林洋氏提出の博士学位申請論文は，学位審査委員一同一致して博士（文学・論文）の学位を授与するに価するものとして報告する次第である。